



風や奈落見えたる目の手術
 灰被りと言ふ壺にあり枯山河
 微笑も言葉の一つ年の夜
 草生水は裔の種火よ枯木星
 赫々と鹿肉焼かれ神迎
 ばたばた茶海に二重の虹かかり
 触れたきや遠き記憶の皮手套
 観音の千手忙しき年の暮
 遮断機開き君喪失の冬の街
 宵寒や鋏の芯へ油差し
 打ち豆の木槌調子の空叩き
 猫脚の湯槽の柚子湯マンハッタン
 よく笑ふ安曇野産のくるみ達
 長芋を掘るやこの世に身を残し

*

小林貴子
 安部克詠
 唐澤南海子
 清水道径
 川村五子
 渡辺真帆
 長島環
 福島米雄
 瀬戸柚月
 小口和子
 今井愛子
 宮島英子
 柴野公子
 藤澤雅子

人誰も幾度か迷子久女の忌
 ぎしと剥くキャベツや人を赦す氣に
 隙間風無き子の家に長居せず
 時をたのしむ時計屋の吊し柿
 綿虫のごとき我が身の不安定
 菊焚くや意地悪婆の血を鎮め
 世の憂さを啄みてをる寒鳥
 十二月今昔杳として渚
 綿虫や行き所なき父の詩碑
 顎鬚の桂男や落葉掃く
 蓑虫が古着着こなす梶下
 干蛸の生乾きなる瀬戸の冬
 薬喰鯨の尾羽は縁起物
 死して立つ僧兵のごと枯紫陽花
 短日や山削りたき峡の村
 冬耕の音で寝付きの大地かな

中澤良子
 古畑恒雄
 柴田きよ子
 原田宏子
 斎藤剣岩
 依田弘子
 名取大輔
 鈴木湖愁
 内堀紀香子
 佐藤詔子
 竹内健
 柴田洋子
 渡嘉敷皓駄
 飯島千花梨
 宮下志花子
 原保次郎

はじめに。労るという気持の柔軟さを持つことは意外にむずかしい。医療関係の仕事では、人一倍、労ることの大切を説きながら、私の気持はつねに直線を愛したようだ。即決即断が好きだ。この頃、自分にも人にも労る、柔軟さが必要なことを感じる。俳句の上では、ことばの粘るような軟らかさ。季語一つでも上から被せるように用いるのではなく、その成り立ちを知って、下から、根つこのところから用いるようにすること。自分の実感をこめないと季語が生き生きしない。

灰被りとは

灰被りと云ふ壺にあり枯山河 安部 克詠

「灰被り」とは窯口の灰に埋れた作品をいう由。期待の壺が出現。そこに枯山河がある。「あり」に工夫がある。「ある」ではおどろきが生まれない。壮大な「枯山河」を一個の壺に見た。陶芸を志す者の心境をこめた一作と読んだ。克詠さんからすばらしい花瓶を貰い、愛用している。

微笑も言葉の一つ年の夜 唐澤南海子

「年の夜」と置いた見事な落ちつきに感動した。一年最後

の年越しの一夜。なにが一年のしめくりか。「微笑」だという。ものではなく、万感の思いをこめた「微笑」を返し新年を迎える。最高ではないか。季語が大きい。そこに作者の志が明快に見える。これを思想(詩想)と思う。

草生水は裔の種火よ枯木星 清水 道径

「草生水」は石油の古称。臭水(くさみず)がもとの表記。作者が在住する越後は石油の産出国。まさに昔々の先祖のおかげで末裔は「種火」を手に入れている。掲句は「枯木星」の季語がしっかりと地に着いているので感心した。手堅い。私が枯木星という季語を知ったのは水原秋櫻子『葛飾』の一句「枯木星またゝきいでし又一つ」であった。高校三年のとき。以来、冬枯れの木立の間に煌めく星を意識した。同じ頃山口誓子の『凍港』から「おはわたへ座うつりしたり枯野星」も知った。枯木星・枯野星が俳句初学の頃に記憶した季語なので、いまでも用いたい思いがある。が、秋櫻子や誓子にわるいような気がしてつい使っていない。道径さんのいゝ句に出会ったので、私も使い始めようかと思っている。

赫々と鹿肉焼かれ神迎 川村 五子

出雲から地の神さまが地元へ帰られる。陰暦十一月の「神

迎」。鹿肉と神迎との取合せから、私は諏訪の神さまを連想した。諏訪では鹿肉を食するため、「鹿食免」と称する護符が大社から出される。大っぴらに食べてもいいと公認の場を連想し、珍しい作とみた。

ばたばた茶海に二重の虹かかり 渡辺 真帆

「ばたばた」茶の擬音の忙しさは、やはり冬の季感があろう。松平不昧公伝来の茶の風習。囲炉裏を囲み、世間話をしながらばたばた茶を立てて飲む。茶には炒り豆、茶の花など当座のものを入れる。日本海に臨む新潟県(越後)の冬支度の気忙しさ。海には雨上りの二重の虹。虹の自然の演出も太

今月の秀句

閑や奈落見えたる目の手術 小林 貴子

同時作に「眼帯はどくろの形クリスマス」もある。網膜剥離の難病の手術に耐えぬいた一連の作は体験詠としてぎりぎりの崖縁、瀬戸際に立った自己の姿を凝視したもの。外は閑が吹きささぶ真冬、この世の奈落、地獄を見たという。病臥し、顔を伏せたまゝ同じ姿勢を保ち耐える。その苦しみは想像を超えた世界。重症かとの不安の中で、作句が唯一の救いであったであろうか。生涯に意味をもつ作であろう。

平洋のゆるやかな自然の経過とはどこか違う。ばたばた茶一つにも日本海地域の自然が生み出した忙しさ、地貌の特徴があざやかに出されている。

触れたきや遠き記憶の皮手套 長島 環

皮手套の記憶と記しただけでも、切なく胸迫るものがある。いまでも触れたい思いだという。以下十二音の遠い記憶をあざやかに提示して、そこから「触れたき」という明快な主観を取り出し強調する大胆さが快い。一世代新しい作り手の登場を思わせる。すでに「岳」誌内では知られていても、俳句作品の詠みの技法において、世代の新しさを感じさせられた。

観音の千手忙しき年の暮 福島 米雄

観世音菩薩がとりわけ忙しいのが年の暮。一切衆生を救いたいと身に千の手と千の目を得たいと願った姿の仏様。千手観音とはいえ、ほとんどは四十二の手が仏身から出ているのであるが、現世の天災人災つぎつぎと襲い来る怖ろしさの中で、どんなにか仏様の救いの手を待っている人が多いかと思われる。善光寺膝下から唐招提寺前に居を移された作者だけに、慈愛の一句。体調すぐれないとかがう折から、お見舞い申し上げたい。

遮断機開き君喪失の冬の街 瀬戸 柚月

「遮断機開き」から私は不意に雑踏を思った。踏切に待機

拓くといは ③⑦ 自句寸言②①「天の川から」

天の川からさんさんと檜の香 昭和59年

「鷹」（昭和五十九年十一月号）所載。飯島晴子が盛んに引用して喧伝してくださった。木曾上松赤沢美林での合宿体験がもとにある。檜林に懸かる天の川から芳香のシャワーを浴びている感じ。天然落葉松の美林調査にも同行するなど、門外漢ながら四十代半ばの若さも加わり、林業への興味から、教えられることが多かった。この年は蘭（あららぎ）の木地師小椋氏に話を聞き、馬籠から岐阜へ出て、鶴飼を見る。『春の鹿』所収。

首据わる赤子に秋の畝傍山 昭和59年

「鷹」（昭和五十九年十二月号）所載。湘子推薦句。八月二十四日から二泊三日、信大学生俳句会飛鳥・桜井・室生・松坂吟行に参加。掲句は初日、檀原神宮前の旅館での初句会詠。秋晴の囁目吟、すらすら詠み愛着句。清水治郎、曾根原幾子、小澤實、中西夕紀も参加。学生は下平重人、小林秋市、富樫均ほか。後から小林貴子も参加。二日目は名張山中の民宿泊。晩まで句会。道中難儀した思い出も。学生の青春気分には圧倒された。『春の鹿』所収。

井月の村きさらぎの蟬の殻 昭和60年

「岳」（昭和六十年四月号）所載。「伊那美鷲、春日愚

良子宅」と前書。一日愚良子に美鷲の井月の墓所ほか、彷徨先を案内して貰う。蟬の殻は墓所周辺詠。金子兜太が朝日新聞のコラムで掲句を絶賛。井月に関心を抱きながら、打ち込んでいない自分にもどかしさを感じていたこれを機会に井月文献を読み出した。『春の鹿』所収。

春暁の夢に力の入りけり 昭和60年

「鷹」（昭和六十年六月号）所載。湘子推薦句。翌月も「田鋤牛にぶき空気にぶつかりぬ」が推薦句に入る。好調であった。一月から毎月「子規秀句」を「鷹」に連載。結局、平成五年三月まで九十七回連載。後に私の主著『子規秀句考——鑑賞と批評』（明治書院・平成八年九月刊）A五判五一七頁の大きな本になる。

「鷹」同人会長五年目、句作も評論や論文執筆にも意欲があり、張り切っていた。春の夜明けの夢がなんであったか。艶なるもののような気がする。『春の鹿』所収。

捕虫網白きは月日過ぎやすし 昭和60年

「岳」（昭和六十年十月号）「戸隠道」所載。この年、七月二十日、六年生の姪が学校からの帰途落雷に遇い即死。衝撃を受ける。おしゃまな子で、将来歌手志望であった。不意にわが少年時代を思い、またわが家の二人の少年の中学生活から、白い捕虫網が浮かぶ。戸隠からの帰途であった。好きな句で、しばしば揮毫する。『春の鹿』所収。

していた人たちがどっと押し寄せる。誰彼の区別もなく、人は次々と流れてゆく。君が居なくなつた冬の街。それを改めて自分に納得させるために、置いた上七音。灰色の冬の街を遮断し、ふたたびもとへ戻す。このわずかなことばの操作が現代俳句の心理詠なのである。

宵寒や鉄の芯へ油差し 小口 和子

「宵寒」は秋の季語。鉄の芯とあるから、この鉄は庭仕事用の剪定鋏などであろうか。洋裁和裁などの裁鋏ではないようだ。地味な着眼に堅実な暮しが見え、宵寒には明日の仕事への配慮も感じられる。

打ち豆の木槌調子の空叩き 今井 愛子

私は奥会津の只見の冬の保存食「打ち豆」を宇多喜代子さんから教えられ、『季語体系の背景』（二〇二頁）の東北の項目に紹介した。「青い大豆を湯に通し、一粒一粒を木の台の上で木槌で三度くらい叩いて平べったくして、乾燥させ貯蔵する。」とし、子どもの夜なべ仕事。老人が昔ながらのやり方で伝承していると書いた。早速、掲句の投句があり、木槌の好調子が「空叩き」をするとの弾んだ一句を得た。作者は長岡在住。「打ち豆」を知り、暮しを思い浮べた。

猫脚の湯槽の柚子湯マンハッタン 宮島 英子

居住地はニューヨークマンハッタン。その湯槽に浸り、

今宵の日本流柚子湯を愉しむ。一人入り一人流す湯槽の洒落た猫脚も映画のシーンのようにあざやか。

よく笑ふ安曇野産のくるみ達 柴野 公子

種皮が薄くて手で破り得るくるみ。手打くるみ。菓子くるみともいう。丸々とした大粒の菓子くるみを「よく笑ふ」とみた。籠にでも盛られたさまか。安曇野産が愛しい。

長芋を掘るやこの世に身を残し 藤澤 雅子

長芋掘りの深いトレンチから次々と芋を掘り上げる折の感慨か。「この世に身を残し」は、毎年の作業とはいえ、一年一年老いを重ねる嘆きを省みたものか。

以上の他に雪嶺集、前山集からの推薦候補作を掲げる。

鯛焼をはふはふと歯の無きごとく	野口美智子
砂滑も琵琶を聴きしか壇ノ浦	樋上 照男
雪吊も夜空もきゆつと緊まりたる	西牧千恵子
冬木の芽しつかり者と見受けたり	土屋 忠史
嘶きてみたき枯野となりにつけり	功刀たかね

人を赦す気とは

ぎしと剥くキャベツや人を赦す気に 古畑 恒雄

「人を赦す気に」とはどんなときにも思われるであろう。

作者は高名な弁護士であるが、もとは最高検の公判部長。ときに法務省保護局（罪を犯した人の立ち直りの支援をする）の局長を歴任。つねに「人を赦す」立場に身を置きご自分をみつめて来られた貴重な体験を重ねておられることを知ると、掲句の偶然の些事は読み手にとってどんなふうにも読めるようだ。ぎしと音立て剥かれたキャベツの次の皮も同じキャベツ。「人を赦す」とは社会的意味を持ちながら、生き方の問題に深く関わっていることを教えられよう。

隙間風無き子の家に長居せず 柴田きよ子

寒さ知らず、快適なマンション暮らしから、鄙暮しのわが家が恋しくなったという。暮しの価値観をしっかりと持たれる作者にとり、隙間風をいやなものとは知りながら、どこか懐かしいものと、愛情をもって受けとめておられるのが微笑ましい。

時をたのしむ時計屋の吊し柿 原田 宏子

田舎の時計屋の軒先にさがる吊し柿。時計屋の時計が時間を刻む。それに合わせるように黒ずんでゆく吊し柿。身近なところへの着眼がおもしろい。一気に干し上がらない吊し柿へのお茶目な見方に写真の目が生かされている。ユニーク。

綿虫のごとき我が身の不安定 斎藤 剣岩

わかりすぎる句であるが、綿虫の浮遊する冬を捉えて「不安定」との気持を強調したかったのであろう。比喩ではある

ないように、桂男には落葉を掃かせてバランスをとったものと、みえみえ。おめでたいおめでたい。

蓑虫が古着着こなす税下 竹内 健

着眼に飄逸さが出て、一句がおもしろくなりつゝある。名古屋在住の好青年俳人。家庭を愛し、人柄にも味がある。

干蛸の生乾きなる瀬戸の冬 柴田 洋子

岡山の作者。平凡な一句に実がこもり、立派。蘇生の感。

薬喰鯨の尾羽は縁起物 渡嘉敷皓駄

今月の秀句

人誰も幾度か迷子久女の忌 中澤 良子

「ホトトギス」同人を除名された杉田久女の忌日。ひとは生きていく上で何度か「迷子」になる。そのときの久女の気持を端的にいうならば生き方を見失った迷子のようなものかという。迷子という、子どもが家路を見失ったいゝ方に素朴な純情さを感じられ、久女忌を連想したところも、良識的な一句。そこが一抹の物足りなさでもあるが、迷子になりながら、なお生きる方途をさぐる粘り強さに好感をもつ。

が、季語の存在によってわが身に実体感が出た。

菊焚くや意地悪婆の血を鎮め 依田 弘子

枯菊を焚く効用がこんなところにあつたものとのユーモラスな一句。「意地悪婆」がいよいよ元氣。

世の憂さを啄みてをる寒鳥 名取 大輔
なにか地面を突く寒中の鳥。「世の憂さ」との作者の思いをそこに投影した。途端に一句が立ち上つたもの。

十二月今昔杳として渚 鈴木 湖愁

長い句歴に生きる作者。十二月に入り、かつて日本が大戦に突入した十二月を思うにつけ、この月は「杳として渚」だという。「杳」は奥深くくささ。渚という歳月の水際が昏い。昔も今も。勿論、今に力点を置く。巧みな作。

綿虫や行き所なき父の詩碑 内堀紀香子

作者の父は詩人の龍野咲人先生。わが敬愛の一人。小諸市石峠の家が人手にわたり、その庭に建つ先生の詩碑が「行き所なき」という。火山灰土と溶岩の地石峠から美しい心やすまる詩と散文を紡いだ咲人先生をしきりに懐かしく思う。

鬚鬚の桂男や落葉掃く 佐藤 詔子

月に棲むという桂男。美男子の称とも。わが亭主讃の一句か。愛娘は岳俳句会賞受賞。いいことづくめなので、妬かれ

沖繩在住詠。寒中の滋養に鯨を食べる。鯨の尾と身の間の肉尾羽毛は珍重。「おばいけ」とも。尾羽は沖繩人にとりもとても大事にされる旧正月の縁起物だという。鯨は賓客。

死して立つ僧兵のごと枯紫陽花 飯島千花梨

寺苑の枯紫陽花のさまを「死して立つ僧兵のごと」と掬い上げた表現に温かい配慮、まなざしがある。死した弁慶が敵に立ちはだかる気合いを見るようで、古めかしい句材を上手に生かそうと工夫がうかがえよう。初投句の作者。

短日や山削りたき峡の村 宮下志花子

峡に夕日が沈む山。これを削ればあと一刻、陽が射すものと勝手なことを言い放つが、山人の切なる短日の思い。

冬耕の音で寝付きの大地かな 原 保次郎

大地の擬人化が共感を呼ぶ。山眠るではなく大地眠る。

上記以外の岳集推薦候補作を掲げる。

軍用機頻りに通る星月夜	小林 春代
初雪と同じ匂ひの葉書来る	成保 房子
失ひてさらなる敬慕冬の虹	山田 千春
産土は加持の学海年歩む	甲田 和利
口紅の底にある闇冬深し	木村さとみ
墨の滲みほどのゆとりよ年の暮	上脇 修